

# DAS KAPITAL

## 23/10月学習会の案内 第56回「資本論を読む会」

日時 10月27日(金曜日)  
午後6時30分Zoom開催

今回は「第4節 資本と収入とへの剰余価値の分割比率から独立して…」と「第5節 いわゆる労働基金」[岩波文庫(三)p155-p177]。



9月の「資本論を読む会」は9人で開催しました。今回の学習範囲は第2節の「拡大された規模における再生産にかんする経済学の謬見」と第3節「剰余価値の資本と収入とへの分割。節欲説」。いつもながら何と長たらしい標題でしょうか!

その割には意外と内容はシンプル

なようです。第2節の「謬見」とは間違った意見や見解とのことで、アダム・スミスら古典派経済学者らに対して、彼らは「個別資本の分析では、可変資本と不変資本と分割される」ことを認めているのに、「(拡大再生産された)社会的資本の分析では、可変資本(労働力に投下された価値部分)のみに解消し、労働賃金の支払いのみに支出されるという不条理な結論に到達する」(p140-141)とマルクスから批判されています。

第3節は資本家の悩ましい「節欲」問題。「アダムスの禁欲」「蓄積衝動と享楽衝動とのファウスト的葛藤」(p146-147)などとの文学的表現で、「資本家の節欲による資本蓄積」などが語られています。ここで出てくるアダムとは「“アダムとイブ”のアダム」で、アダム・スミスとは関係ありませんでした(ここで笑)。

今回はまた長たらしい標題「第4節 資本と収入とへの剰余価値の分割比率から独立して蓄積の大きさを規定する諸事情。労働力の搾取度-労働の生産力-充用される資本と消費される資本との差額の増大-前貸資本の大きさ」です。レポーターはKatoちゃんです。よろしくお願いします。

終了後の懇親会では終わったばかりの自治労道本大会や、ソ連東欧崩壊(社会主義建設のあり方)などについて話題になり、楽しく過ごしました。

☆「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから Sugiさん

<b>第二節 拡大された規模における再生産にかんする経済学の謬見</b>
・アダム・スミスは、生産的労働を強調するあまり、追加資本はすべて追加労働力の購入に支出され、賃金すなわち可変資本のみに投下されると説明をした。
・各個別資本は不変的構成部分と可変的構成部分とに分割されるが、社会的資本は可変資本のみに解消される、すなわち労働賃金の支払いにのみ支出される、という不条理な結論に到達する。
<b>第三節 剰余価値の資本と収入とへの分割。節欲説</b>
・剰余価値は資本家によって全部消費されるものと考え、また蓄積を扱う本章では、これまで全部資本に転化されるものと考えた。しかし、実際は剰余価値の一部は資本家によって収入として消費され、他の一部は資本として蓄積される。
・これら二つの部分の大きさは、この分割を行うのは資本家であって、彼の意志行為(意志如何)による。
・もちろん資本家も人間であるという意味では、享楽の欲望を持っている。彼が人格された資本であるからにすぎない。
・彼を突き動かす推進的動機は、使用価値と享楽ではなく、交換価値とその増加である。
・彼は生産のための生産、社会の生産力の発展を強制され、価値増殖と資本蓄積の狂信者となる。
・古典的な資本家は、資本蓄積に対する個人的消費を、自己の職分に対する罪悪と考え、その意味では「禁欲的」。
・だが、資本主義的生産が発展し蓄積が進むに従い近代的資本家は、熱狂的な禁欲を哄笑・嘲笑するようになる。
・近代化された資本家は蓄積を、自分の享楽衝動に対する「節制」だと考えるようになる。
・資本主義的生産の進歩は、享楽の世界をつくり出すのみではない。投機と信用制度をもって、突然の致富の幾多の源泉を開く。
・奢侈は、資本にとって必要となる。富の誇示(ステータス)であり、資本家中間の贅沢は、営業上の必要、交際費の一部にもなる。